



第9回目の青枢通信は竹村 敏 (びん) さんです。

竹村さんもまた青枢会ならではの、独自の表現・方法論を持たれる作家さんで、既成の絵具を使った描写ではなく、各地の土や砂岩などを樹脂と混ぜ合わせたオリジナルの材料で制作されています。

今回、越谷のギャラリー K での個展にお邪魔して、現在の画風に至る経緯などをお聞きしてきました。

竹村さんが構築されてきた、Bin の創作の秘密に少しでも迫れば良いと思います。

まずは会場を一巡して、今回の大作のひとつ、「手探」の前でポーズしてもらい、テーブルに移動してから、若き日、ふる里・北九州での事の始まりから順に語っていただきました。



新作 (P100 手探) の前にてポーズ

竹村さんは三菱系の K 商社で企画営業のお仕事をされていた。そこでは合成樹脂などの原材料を扱う仕事で、リサイクル原料の回収なども手がけられたそうです。また、もともと考古学や骨董品等に興味があり、古美術品の収集もされていて、そんな折、九州大学の考古学の教授と懇意になり、調査・研究に同行された時期もあったそうです。その後 K 商社を退社され、古美術店を自身で経営するようになります。しかしバブル崩壊後は店の経営が思わしくなく、閉店をされるのですが、そこから竹村さんの真骨頂、今度は自分が絵を描く事を決意されます。それまで培って来た知識と審美眼を生かし、独自の方法での絵画制作の道に進まれます。

考古学や古美術、また仏教絵画や海外の原住民のアクセサリ類など、竹村さんの興味はグローバルで、それら時間を経過してきた古いモノだけが持つ存在感と美しさがインスピレーションの源となっております。また、そのイメージを具現化する為に、かつて取り扱っていた樹脂を媒材として、既成の顔料ではなく、その作品を表現するに相応しい現地から採取した砂や土を使っておられるのも、お話をうかがっていると、自然な選択であったのだと納得した次第です。

ドレスとその中の女性のラインが美しく調和しています。



竹村さんはしばらく前から目を悪くされ、2015年7月に手術、運良く回復されました。

見えなくなる事への不安を作品のテーマにされて、42回青枢展にてその連作で外務大臣賞を受賞されています。その作品と選評を以下に紹介します。



「作者自身が眼病に冒され、失明の危機・恐怖との闘いの中での実体験から、この連作が生まれたという。絵描きにとって、見えなくなるというのは死んでも同然の恐ろしさでありましょう。画家が世界を知覚するのは自身の眼であり、見るという行為は表現の入り口であり出口でもある訳です。そんな不安と向き合い、5つの切り口で表現された連作は、鑑賞者に静謐でありながらも重量感のあるメッセージを発しているようです。強い存在感を持つこの作品は、受賞に相応しいという審査員の賛同を得た力作であります。」 選評・米谷



P80 記憶の門・橋の向こう



P100 不定称

本人は多くを語られませんが、画歴を拝見すると、海外での出品・受賞が数多く散見され、日本の古美術以外にもグローバルな収集をされたのと同様に、幅広く活躍されているのが印象的です。

また今回の個展においても、左下に掲出の作品（不定称）のような、今までと異なる新しい試みをされた作品もあり、精力的に画業に取り組まれておられます。

かねてより制作されている「記憶の門」のシリーズは、生まれ故郷の炭坑の歴史を題材に、仏教の言葉で顕せば、人々の営みの諸行無常を描いた作品と言えるでしょうか。

今後数年の間に、ライフワークでもある記憶の門シリーズの集大成を大作として発表していきたいと語られていますので、どんな作品になっていくのか楽しみです。

竹村さんの作風を見ると、普通の画家が絵の道に進む時に通って来るデッサンのような描写から始めたのと異なる仕事である事が解ります。

プリミティブ（原始的な）アートというジャンルが一番近いようにも思えますが、モチーフを見ながら描くのではなく、モチーフがかつて存在した地域から、砂や土を持って来て塗り込んで、その時代に思いを馳せながらの作業という、祈りにも似た制作であるかもしれません。

絵を描くという行為には様々なアプローチがあるのだと考えさせられます。これからどんな展開になっていくのかも目が離せないですね。



青枢通信も第9号となり、いよいよ次回は記念の10号となります。

記事を書くたびに、青枢会の作家さんならではの素晴らしさに感動しています。なかなか思う様に発行は出来ておりませんが、気長にお付き合い下さい。先日行った東京芸術劇場・フレンズ展は見応えのある展示になっておりました。ただ、特にテーマや狙いを定めずに作品を持ち寄った為、青枢展の縮小版という印象になってしまったかなという反省もしています。

来年の展示に向けて、コンセプトを考えていきたいと思っています。どなたでもアイデアがあれば是非提案していただけたらと思います。

でもまずは、10月の本展にむけての制作ですね。

今後ますます、会を取り巻く環境は厳しくなっていくと予想されますが、逆風に負けず、素晴らしい展覧会・印象に残る展覧会・観に来ていただいたお客様に強くアピール出来る展覧会にして行きましょう。

皆さんの力作に期待しています。

米谷